

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二二—一九九九）のこ
 とばを掲載します。

この地上に、雑草というようなものはない、と知った
 ときは、大きなおどろきだった。そして喜びであった。
 ほとんど都会のなかばかりで生活してきた私は、草と
 いうものにたいして、ほとんど無関心でした。

富士山麓に住むようになってから、ある日、近くの御
 胎内公園（清宏園）の園長である池谷貞一さんと話して
 いるうち、ふと、私は足もとの草に気がついた。その一
 本を引き抜いて、「これはなんという名でしょうか。いろ
 いろな雑草があるようですが……」とたずねた。

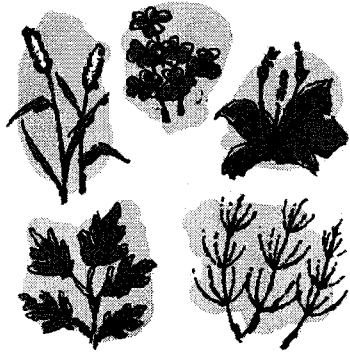
池谷さんは、その草を一目みるなり、「これはヒメジョ
 オンですね。いろいろな山野草がこのあたりには多いで
 すよ」とこたえた。――山野草！ 私はビクツとした。そ
 うだ、山野草。雑草ではないのだ。それまで私は、この
 ヒョロ高いような（三十〜五、六十センチくらい）、ど
 こにでも生えている青い草を、つまらぬ雑草だと思っ
 っていたいなかった。そもそも「雑草」とはなんだろう。

例によって辞書をひいてみると、――栽培する作物以外
 の種々の草、役に立たない草。などと出ている。栽培す
 るもの以外を雑草というのはわかるけれども、いったい、
 この世に役に立たない草というものがあるであろうか。
 ヒメジョオンはキク科の越年草で、可愛らしい花が咲く。

4月のテーマ | 自然賛歌

個性を持った
 りっぱな草

丸山竹秋



けつして役に立たぬ草ではない。役に立つも立たぬも、
 それは人の心、あるいは利用の仕方ではあるまいか。道
 ばたの役に立たぬ草などないのだ。どの葉もどの茎も、
 みなそれぞれすばらしい個性をもったりっぱな草なのだ。
 つくづく思う。世の中に雑草がないように、人の仕事

にも雑用というようなものはない。どんな用事でも、そ
 れにはその意義がある。ただ自分の目の前に生えてい
 る草を、自分が直接に必要としているか否かが問題とな
 ることがあるように、自分にとって今すべき仕事がある
 かどうかは、自分が判定をくだせばよい。

いずれにせよ、私たちはもう少し大自然のものに注意
 したいと思う。そして道ばたの草にも一片の愛情をかけ
 られるような心のゆとりをもちたいものだと思う。そう
 した心がないとき、私たちは山に行っては山を荒らし、
 野に出ては野をよこして、土地の人にひんしゆくされる
 ような行為をするのだろうと考える。

ここまで書いてから庭に出たら、小石でかこんだ隅っ
 この土の上に、ホトケノザと山アザミが同居しているの
 に気がついた。そのまま外を歩いてみると、道ばたのか
 わいたところにも、ところどころこの草が可憐に散らば
 っ生えている。私はその一本をそっと抜いて部屋に持
 って帰ろうかと思った。しかしちよつと考えて、そのま
 まにしておいたほうがよいと決めた。きょうは、どの草
 も折らずに、そっとしておこう――そのほうが心がやすら
 ぐ思いだった。
 （著書『よろこんで生きる』より）

四月度の一句「マツキチあり、少女に託す、マツキチあり」
 丸山竹秋の「マツキチあり」
 丸山竹秋の「マツキチあり」